ハープを使った音楽表現力養成の試み

阪　田　順　子

Harp Class for our Beginners

Junko Sakata

This study aims to cultivate our students' musical possibility. Usually they study piano and develop a larger repertoire in future. In fact they are put off by piano lessons, gradually disliking music itself. To solve troublesome cases, I try to immense them in a fresh musicality. An example is the harp with a new easy lesson program that I will develop.

Key words：harp, cultivate musicality, training course, various harps

はじめに

筆者はかなり以前より、ハープを音楽教育に使うのがよいのではないかと考えてきた。その理由は以下のとおりである。

① 一見複雑そうに見えるが、箏と同じく単音の連なりで、響きを重んじるため少ない音数でも音楽性を感じさせる。
② クロマティックが可能である。
③ 音響が直かに奏者の身体に伝わり、自身の出した音を把握しやすい。
④ 音色がやわらかく音量も少なめで、奏者自身にもやさしい。
⑤ 奏する姿が美しい。

どんなおとなにも子どもにも勧めたい楽器ではあるが、ここでは真近に控える18歳以上の保育者養成課程の学生を対象に考えていきたい。学生の音楽性を拡げるために、筆者が受けた１年半のインテンシヴな初心者用レッスンを基に、ピアノ初学者、それに準ずる者、ピアノ経験をある程度持つ者に対する半期の授業プログラムを考えてみようと思う。

筆者はピアノ経験は50年と長いが、ハープを演奏するのは初めてであった。週１回月３，４回20分から40分のレッスン時間であった。レッスン内容、使った教則本は一般的なものであったようだ。本稿では筆者の経験した進度をひとつの目安とし、その都度受けた注意事項を鑑み、感じたこと考えたことおよび学生への応用案への提言をまとめようと考えた。

第一章　筆者の経験から

筆者はハープというものを知るために、１年半でひととおり初歩の課程を修了した。それは一通りの基本奏法を会得し、そこそこの曲が弾け、ハープを演奏していると実感できるレベルのもので、筆者本人のほぼ個人的な見解である。ハープの専門家によれば、もう何段階かを経なければ基本奏法習得とはいえない、と感じることがあるに違いない。

ここでは教則本のⅠからⅡへの課程と、ある段階以上のアルペッジョ奏法をひとつの目安にした。

ハープにはいくつかの種類があり、諸々の個人的判断、先入観により、小型ハープから始めるのが良いのではと思っていた。それでサウルハープから始めたのであるが、１ヶ月も経たぬうちにグランドハープと理屈は全く同じであり、むしろはじめからグランドハープで始めても何ら問題はないと感じたのだった。このことは師からも先にいわれていたことであったが、いきなり大型ではというひけ目と、小型で全体を把握した後、順に進むのが自然に感じられたのである。しかし子どもが分数ヴァイオリンを出世魚のように使い進めていくのとは違い、こちらはこれ以上体格が大きくなる予定もなく、成長しきっているわけであるから、なんら問題はなかったのである。むしろ、より早くハープの本質に無駄なく入っていけたと感じている。

生徒によっては、レッスンはグランドハープで受け、家での練習は物理的要因等で小型を使うというものが多数であるとのことであった。

サウルハープとアイリッシュハープ、その他いくつかの小型ハープが市場にでていて手に入りやすいが、これらについてはいずれ論考をまとめたい。

第１節 心構えと諸注意

①　楽器の扱い

ハープを扱うときの注意で最初にすべきは、楽器の本体に傷を作らぬように、ということである。枠はすべて木製であり、ピアノ以上に接近接触するからである。奏者の上半身に硬い物をつけないこと、顔や頭にアクセサリーなど付けないほうがよいし、特に右の耳から肩にかけては御法度である。垂直に立てたハープの上体を肩にもたせかけるときは、重さもあるためゆっくりそっとする。元に戻すときも同様である。調弦用のチューニングレンチは硬いので、本体から離しておくこととする。譜面台は金属製のものが安価であるが、本体と接触した場合を考え、木製のなるべく柔らかい素材が望ましい。

楽器の移動は、下部についている滑車を使う。支柱の中ほどに手を入れられる空間があるのでそれを使いゆっくりひく。普段は一重の布カバー（ビロード状で柔らかくやや厚みのあるもの）を埃除けや、傷除けにしているが、しばらく使わない時は専用のキルト状のしっかりしたカバーで保護する。地面についている部分にも、簡単に動かぬよう厚めの綿入れ状の下敷きを用いる。地震対策として、その周りに多少傾いてもそれ以上倒れないための、ある程度高さのあるしっかりとした安定形状のもので囲めると安心であろう。

②　服装

グランドハープの場合はペダルを使うとき足元をかなり活発に動かすことになるので、両足が離れても気になりにくい衣類を選ぶ。女性ならばたっぷりめのスカートや、ズボンの類がよいかと思う。靴は４～５センチのかかとのある、いわゆるローヒールくらいがよいであろう。流行の合成樹脂製のサンダル状のものは、本学生の半分近いものがはいていて人気なのだが、筆者の試すところややすべり気味に感じるので望ましくない。我々は進められてダンスシューズを使っている。地面につく面が裏皮状で滑りにくいものだ。長いプロ経験からチャコットの４センチヒールを生徒にすすめる、というのが定番のようだ。これもまったく滑らないわけではなく、ペダル移動にある程度のスムースさも必要だからだと感じた。

ただ、ペダルを使うのは初心者後半であるので、いずれ先のために覚えておく、ということにしたい。

③　準備するもの

学生に準備させるものは特にない。爪をピアノの時以上に整えることくらいである。
爪に関しては、保育養成課程でありながら無頓着な学生の多さに戸惑う。昨今のネイルブームも拍車をかけているのか、美の基準が増えたためなのか。ともかく長い爪ではピアノ以上にハープは危険を伴うことを理解させたい。

ピアノレッスンでは口喧しく注意しているが効果があがらず挫けそうになる。が、まめに注意することにしている。ただしまれに配慮を要する爪の者もいる。巻き爪である。これは若年層でもあるようで一定以上は爪を切ることが出来ない。カットするライン、分量に注意しなければならない。

④　個人購入が必要なもの

購入が必要なものは、初心者では特になく、教科書くらいのものであり負担はないと思われる。レッスンが進み、学生が楽器本体を欲しいと思う程になれば、まずはレッスンの成功の兆しである。サウルハープは10万円台からあり、中古楽器も多いので個人所有楽器の可能性はピアノ以上に大きいだろう。また楽器会社のレンタルシステムも年々充実してきているように思われるので、それらを利用の可能性も示唆したい。

第２節 楽器のこと

前述のとおり筆者は最初小型のハープが簡単そうに思われ、価格も手頃であったためサウルハープを使い始めた。大型のグランドハープ（後述のペダルハープのこと）は手に余る気がしたためであった。

ところが１ヶ月たった頃大きさが違うだけで原理はまったく同じだということがわかり、同じ手間ならば音響的により素晴らしいグランドハープのほうが早道に思われたのである。

違いは何かというと価格と置き場所である。必要なスペースは縦型ピアノのほぼ半分であり、グランドピアノには比べようもなく、畳半畳で収まるのである。奏者用スペースを入れてもたたみ一畳以下なのである。 難しいことではなかった、というわけで思い切って購入したわけである。

ピアノ初心者がはじめからグランドピアノを使うことは少ないのだが、諸条件が許せば、それは練習者にとって理想的なことだと思う。より早い上達の助けになるのも確かだし、メカニズム上、打鍵スピードがより速いので連打も簡単である。音の広がりもよりとらえやすくなり、楽しく余裕ある聞き方ができる。他方縦型は目の前で音が鳴り響くため少々窮屈で音の広がりも感じにくい。

以下、サウルハープはアイリッシュハープより小型であるが、基本は同じであるので、ここではハープ２種について簡略な説明をする。文中アイリッシュハープは通称ノンペダルハープ、グランドハープはペダルハープともいう。

（1）　アイリッシュハープ

本稿では、ハープの歴史についてのべるのが目的ではないので、本学の学生を対象とした、ハープのオリエンテーリングに必要なところのみをまとめる。ハープは楽器史上最も古いもののひとつであり、現存するアッシリアの竪琴、中国の空候など、地球上に広く分布している。本稿中に扱う西洋系の２種のハープに限っていえばアイルランド、イングランド、ウェールズで長く使われているものであり、約千年の歴史を持ち、地域の音楽文化の基盤をつくってきた楽器であることをはじめによく学生に伝える。かたや学生の良く知るピアノも、ようよう三百年になろうとするが、そのもとはハープ同様紀元前まで溯る長い歴史を持ち、同様の深い背景をもっているこ

とを告げるのも忘れてはならない。ただ、形状について両者は対照的である。最古のものから現代のものまでピアノほど大きく成長した楽器は他にないからだ。

アイリッシュハープは、時を経て共鳴胴の増大により音量が増し、弦の増加で表現力が拡がった。世界各地でつくられており、日本製は鉤部の構造改良・改善にて転調がスムーズにできるのが特徴で評価が高い。

図1　アイリッシュハープ[1)]

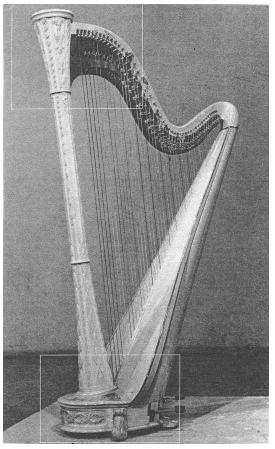


図2　ペダルハープ[2)]

（2）　ペダルハープ

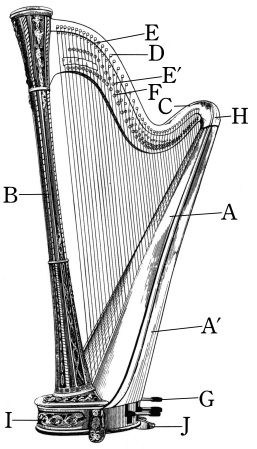
前述のアイリッシュハープは、ウェールズハープ、ケルトハープといった同系列の楽器とともに歴史を経てペダルハープとなる。一般的には1720年ホッホブルッカー、ナーダーマンによって製造されたといわれる。これにより、ペダルを踏むことで、先に繋がった鉤が半音高くできるようになり、鉤操作から手を開放したのである。これがシングルペダルハープで、19世紀初頭まで使われた。ペダル操作の煩わしさから、クロマティックハープが作られはしたものの、普及せず現在もほとんど使われてはいない。

一方、ダブルペダルハープは1792年にエラールが発明し、その後改良を重ねて現在の形となった。仕組みは以下のとおりである。ペダルの２段変化により半音ずつ２度変わる。それまでの鉤にかわって２つのディスクがペダルに繋がり、動かす毎に弦が半音ずつ２回まで短くなる。ドレミファソラシすべてにその機能がついており、例えばペダルのドを踏むと、すべてのドが変化する仕組みになっている。

音域に関して、ペダルハープは７オクターブあり、高音域から第１オクターブ、第２オクターブと数える。各音名はＣ３，Ｄ６などとし、赤色はＣ弦、青色はＦ弦とわかりやすい。ピアノの白黒より見易いのではとも思う。弦が切れた際の注意は、各弦に書かれている何本目の弦なのかの表示を確認することである。弦はガット弦、ナイロン弦、スチール弦の三種類があり、音域により異なる。

・ガット弦　：　　第１オクターブ～第５オクターブ
・ナイロン弦：　　ガット弦に同じ（ただし任意の混用は避ける）
・スチール弦：　　Ｇ５以下の低音（錆に留意し年１，２度変えるのが望ましい）

世界のハープ生産は欧米が中心であるが、近年では日本製の評価も高い。学生にとっては価格帯だけでなくメンテナンスの問題にも関わってくるであろう。



A ： 共鳴板
A’： 共鳴胴
B ： 支柱
C ： ネック
D ： チューニングピン
E ： レストピン
E’： レストピン
F ： ディスク
G ： ペダル
H ： 接合部
I ： 台座
J ： 脚

図 3　楽器の構造と各部の名称[3)]

第 3 節　教則本

ハープ用教則本はピアノほど種類がない。ここでは特に教材研究を経ず筆者の使った教則本をあげるものとする。他教材との比較研究は今後の課題としたい。

主教則本：・ヨセフ・モルナール：初歩者のための実用ハープ教本 1 *Practical Method for Grand Harp and Irish Harp*．音楽之友社，東京，2004．第24刷（初版1968）

・ヨセフ・モルナール：実用ハープ教本 2 中級 *Practical Method for Grand Harp and Irish Harp*．音楽之友社，東京，2004．第11刷（初版1973）

副教則本：・ *Betty Parel*：*First Harp Book*．*G.Schirmer Inc.*，1942

その他　：・雨田光示：サウルハープを弾こう．全音楽譜出版社，東京，1999．第 2 刷（初版1994）

サウルハープを使い始めたとき使ったが、実際はエーデルワイス（p.13）までしか用いていない。

・ 雨田光示編：ハープをあなたに（楽しく学べるアイリッシュハープ）．全音楽譜出版社，東京，1998．（初版1968）

最初の頃サウルハープの音の構造を知るために、「ハープの調子と調弦」（p.6 ）と Lesson 1 第 1 指・第 2 指による 3 度の練習（p.8）程度を使っている。

第二章 学生用プログラムを念頭において

第 1 節 演奏姿勢

各楽器によって身体の使い方が異なるのは当然であるが、何事も最初が肝心である。普段学生がピアノを弾く姿勢を見ていて痛感することは多い。手足の長さを持て余すような座り方をしているものや、足がすらっと長いにもかかわらず、膝をピアノの鍵盤下に微妙に入れ込んでしまって窮屈そうに弾いている者もいる。一旦ついた癖はなかなか矯正に時間がかかるので、最初の姿勢には指導者全員の心配りが重要であるのだ。今後も心強く実行する予定である。

ハープは右肩に乗せるので、身体のプロポーションにかかわらず比較的奏者の最良の位置が決めやすいものだ。最初によくそれを検討し、離れてみたりして、無理のない美しい姿勢つくりに

腐心したいと思う。最もよいと思われる位置を写真で取っておいて、はじめのうちはそれを参考にしばらく続けるのも一案であろう。

椅子に半分ほど腰掛け、足の動きを妨げぬように自然にする。真正面におかれたハープの共鳴胴の下部を両膝の間に、上部を右肩にもたせかける。右膝がより重要で、左膝は自由な状態にする。第１オクターブと奏者の目の高さが同じくらいが望ましい。

手の位置

①　右手

肩から指先までリラックスさせ、１音１音リラックスを忘れないこと。腕を肩から動かす気持ちで弦に置き、腕は共鳴胴に触れる程度。親指は常に上を向いているようにする。

②　左手

右手のようには共鳴胴に当てず、右手より低い位置に置き、肘も身体から離しておくこと。

第２節　レッスン開始

指記号の基本

ハープ演奏に小指は使わないので親指を１、人差し指を２、中指を３、薬指を４としている。次に指を当てる記号「⊓」と、弦からはなす記号「’」を覚える。

（１）第２指の練習

はじめは第２指の練習で、これはすべての基本である。ピアノのさぐり弾き同様、これ一本で簡単な曲ならば弾けることだろう。音を出すためには弦をはじくわけであるが、指先によりどの程度の力でしなわせるかで強弱が決定する。音を出した後は指を手のひらの中にしまうことが重要である。人によっては「手の平内におとす」という表現を使う。１音ごとに指をリラックスさせる習慣もこのときからしっかり身につけると後々楽であると思う。左手も同じである。

この初期の段階ですでに、どんな時も今弾いている音の後半２分の一は次の準備のため、と心がけさせると上達に弾みがつくように思われる。まだまだそのような注意は早いのではと思わず、何事も最初が肝心と、手間を惜しまず伝えるのが肝要であると感じている。演奏者がまだ幼い子どもでなく、学生であるのだから理解は十分できると思う。

左右いろいろな長さでおこない、指や身体をハープに慣れさせたいと考えるため、この段階は少し多めに回数を取ってはどうだろう。

はじめは１音ずつ全音符でたっぷりゆっくり丁寧に弾き、慣れたら２分音符で、次は４分音符で、さらには同じことを１オクターブ下で、４分音符と２分音符のコンビネーションで、それぞれおこなう。退屈な風情が感じられたら、プロの奏する素晴らしいＣＤ，できれば映像で美しい姿を見せるのも一考である。憧れだけでなく、自分の奏する３ヵ月後の姿の想像にもつながり、よい刺激になるのではと考える。

（２）第２指と第１指の練習

次は第１指との組み合わせであるが、第１指は弾いたのち第２指の第２関節におくのが基本であり、以下の練習をとおしてこれを習慣付けることが要求される。これができないと、第１指が行き場に困り宙に浮いて不要な力が入り、前後に悪影響を及ぼすためである。

またこの練習にはもうひとつの重要なファクターが含まれている。レガートで奏するときは、次々に続く音が切れないように半歩先に弾奏の用意がなされてなければいけない。その動きの要素がこの練習には含まれている。弛緩のため手首は回転するが、上下に動くのは避けたい箇所である。

（3） 3本指の練習

特に注意することはない。上記の練習同様におこなう。

（第4指の練習：長期をかける一般的なプログラムではここに入れるのが普通であるが、今回の学生用プログラム上ではどうしても必要とは思われないので省略する。）

（4）筋肉弛緩練習

第1指弾奏後、手を軽く丸め演奏前のリラックス状態に戻す練習である。これはどんな段階にあっても時々取り入れることが必要なものである。こまめに取り入れたい。

（5） 4本指の練習

長さ、指順がまちまちの両手オクターブの練習である。次の音準備の訓練にもなる。練習曲は順列組み合わせの如く多種存在するので、いろいろなパターンを経験することによって、まとまった楽曲を弾く準備になることはまちがいない。学生自身もそろそろハープらしいことをやっているのだ、という自覚が生まれ練習を楽しめる頃でもあろう。上達の早い者ならば発表会用の曲選びもはじめてもよいと思われる。もちろんここまで来る間に、余裕のあるものは副教本を使って、小楽曲をすでに経験できているかもしれないが、ここでは進度が標準の者とそれに及ばないものに焦点を当てているので、特に副教本にはふれないこととする。標準以上の者への副教本の選択・進度・指導に関してはまた別の論考を用意したい。

Molnar 1 pp.28-32 に掲載の2台のハープ用の楽曲はモルナール編曲のものである。発表会で初心者が、比較的容易だが舞台上で聴き映えがし、相方がいるため心細さも減り緊張も軽減するといった利点が感じられる。

筆者は1年後の初発表会でこのロマンスの教師用Ⅱヴァージョン（p.28）を演奏した。個人的な好みからは外れていたが、基本を着実に弾き込んでいくところに地味な難度があった。時代様式としては古典派ハイドン中期あたりの練習曲に近いものをもっている。

発表会の曲選びはなかなか難しい。本学でもピアノレッスン半年後の曲を初めの1ヶ月でノミネートし、2ヶ月目から練習に入るため教師側にも並々ならぬ洞察力と想像力が求められる。学生に合いそうな幾つかの曲を実際に弾いてみせるが、学生の選ぶ力もあまりないため、こちらの自己満足になっていることが多い気がし、反省している。

発表会当日に気付くことは多い。この学生はもっとこういう曲が弾けたかもしれないとか、安全なところで手を打って可能性をつぼみのまま残したかもしれないなどと強く感じ、メモをしておき、発表会後のまとめや総括の中に書き添えることにしている。「先生のオススメ曲」「次の挑戦曲ベストⅢ」というようにである。卒業後のことは追跡調査をしないとわからないが、どれほどそれが道標になっているか知る計画も、いずれ立てるとおもしろいのではと思っている。

（6） 1オクターブの音階練習

ここからはスケールが中心を占めてくる。そのとき第4指の位置が大切なのでここで述べる。上行スケールの場合は第4指が第1指をくぐる。下行スケールの場合は第4指を弾く前に第1指を次の場所に置いておく。ここがスケール上達の基本である。これには肩の動きなども関わってくるので、くれぐれも奏する前のリラックスに注意をしなければならない。

上達してゆけば、テンポを上げていくのが普通であるが、それとともに腕と手の動きは最少に、指の動きに集中してできるだけ早く動かせるようになればよい。あとは練習量によるであろう。

Molnar 1 pp.33-41 に、種々多様なスケール用練習曲がある。筆者の経験ではp.39あたりからそろそろ進度が遅くなってきた。8分音符から16分音符の連続が増加するあたりである。長年の

ピアノ経験者にしてこのような有様であるので、このあたりを今回は視野に入れないこととする。また将来学生に別の視野・可能性が見え隠れしはじめたときに再度考えたい。

第３節　次段階の奏法等

以下に取り上げたのは、初級レベルではあるが今回の学生用プログラムには少々ハードルの高い、練習量を強いる奏法課題である。進度には個人差があるので何名かは半期以内にここまで到達できる可能性もあるだろう。現段階では課題の羅列にとどめたい。ただし、ペダルと効果音３種については、ある１回分のレッスンの中で（または何回かに分散して）このようなもののあることを概念上知っておいて欲しいと考える。ハープを習ったという実感にもつながる、最もハープらしい部分であると思うからだ。

・第４指を使う奏法

・和音の準備

３度、６度、オクターブ、分散和音（３本指のための、）分散和音（４本指のための）

アルペッジョ

（分散和音が各音をほぼ平等に同じ強さで奏するのに比べ、アルペッジョは音価の大半を最高音が占める）

属７のアルペッジョ

・転調

モルナールの教則本に沿うと、スケールのつぎは和音とアルペッジョの順になっているが、前述どおりスケールの後半で足踏み状態になったため、平行して次のペダル練習に入った。ここで筆者はこれまでになかったペダルハープの本格的醍醐味を知ることになる。これはここまで達しない学生にも概念的に頭に入れておいてもらいたいことであるので、習得のためのしっかりした練習はあとまわしにするとしても、ペダル１オクターブ分の存在、その踏み方の基本と難度、現在のハープ音楽はこうやって成り立っているのだという知識を知らしめたいのである。またハープ独特の効果音３種と調弦・弦の張り方結び方についても同様に考えるので、後述することとする。

①　ペダル

まずしっかり目をあけて音階順にペダルを確認し、次に目をとじて足でペダル全体をなぞってみる。電子オルガン等の足鍵盤経験者にはわかりやすいかもしれない。ただ平たく鍵盤順に並んでいないので、頭の中で扇形にイメージを作りなおさなければならない。ピアノのペダルは数が少ないので位置に苦労することはないわけだが、ハープは全音あり、形が足先にフィットする感覚がしばらく練習しないと生まれない。これはもう慣れるしかない、と筆者も観念した。ただ１回分はペダルのために準備したいものだと思う。

②　特殊効果音

以下３種の効果音も筆者自身表面的にしか経験していないのだが、ハープを学ぶ以上きわめてハープらしいこれらの音の理屈は学ぶべきだと感じている。そのため、表面的ではあるがひととおりの説明は加えたいと考える。

a. ハーモニクス（フラジオレット）

記載音より１オクターブ上の音を奏したいときに、弦の長さの半分のところを押さえ、それより上の部分を弾くことで倍音を鳴らすものである。ハープならではの音である。

実際左手の親指の付け根部分で弦を押し、親指で弾奏しすぐ放すことでうまれる音色である。

複数音の場合は小指を使う。詳細は筆者がその域に達した後論考に加えたいと考えている。

b. エトゥフェ

弦の残響を消したいとき、鳴っている音と同時にそれより低い音も手の平で抑えることである。和音が変わるときは頻繁に使われる手法である。低音の響きは大きく、高音は小さいため手の平の使い方が変わる。

c. スタカート

ハープ音のスタカートは、第２指で弾いた後に、そのまま曲げた指の背側で弾いた音の弦を押さえ音を消すものである。

③　弦の張り方と調弦

弦の張り方は、初心者後半で方法を披露し、中級で実際の張り方・結び方を実践したいと考える。調弦については、各音の列は最初に確認させ、各弦の緩み程度は初級前半でも実際に試みさせようと考えている。

おわりに

実際にこのプログラムを実施するにあたり、注意点は以下のとおりである。楽器が一台であること、小型をいれても二台であるため、初年度は少数の受講生から始めなければならない。様子をみて年々台数を増やす方向を考慮にいれるものとする。また常に練習のできる環境にないため、練習量が限られる。必ずしも楽器がなくても工夫次第で練習はできるものだが、現代のコンビニアントな暮らしに慣れている学生に通用するかどうかが問題である。

方法としては、ある決まった曜日・時間帯を決めて楽器を学生に供する工夫も必要であろう。また２年目からはサウルハープを練習用として数台購入し、それ以上に受講者があるならば、何とか万障繰り合わせて楽器を使い回すというプランも可能ではある。

学生のもつ音楽力・表現力をのばす一助としてハープの取入れを考えたわけだが、ピアノ一辺倒では引き出せなかった隠れた感性の養成に役立つのでは、というのが一番のねらいである。それをファーストステップにして次へ進んでいってもらえればと思う。

引用文献

１）ヨセフ・モルナール：初歩者のための実用ハープ教本１ P*ractical Method for Grand Harp and Irish Harp*，音楽之友社，東京，p.6，2004．第24刷（初版1998）
２）ibid.p.9
３）ibid.p.2

参考文献

・雨田光示：サウルハープを弾こう，全音楽譜出版社，東京，1999．（初版1994）
・雨田光示編：ハープをあなたに（楽しく学べるアイリッシュハープ），全音楽譜出版社，東京 1998．（初版1968）
・Betty Parel：*First Harp Book*，*G.Schirmer Inc.*，　1942．
・ヨセフ・モルナール：初歩者のための実用ハープ教本１ *Practical Method for Grand Harp*

and Irish Harp，音楽之友社，東京，2004．第24刷（初版1998）
・ヨセフ・モルナール：実用ハープ教本２中級 *Practical Method for Grand Harp and Irish Harp*，音楽之友社，東京，2004．第11刷（初版1973）
・郡司すみ編：*Harp Lyre* 楽器資料集・；国立音楽大学音楽研究所楽器資料館，東京，1985．
・小板橋又久：古代ウガリットにおける楽器．オリエント，第36巻第２号，p.254，日本オリエント学会，東京，1993．
・クルト・ザックス：楽器の歴史（下）．柿木吾郎訳，全音楽譜出版，東京，1966．（第５版1990）
・正倉院事務所編：正倉院の楽器 No.1，日本経済新聞社，東京，1967．
・*Harvard Dictionary of Music*, 2 *nd ed. Harvard Univ. Press, Cambridge,* 1969．
・*Grove's Dictionary of Music and Musicians* 4 th. ed. 1972．
・*The New Grove Dictionary of Music and Musician,* 1980．
・*The New Grove Dictionary of Musical Instruments, Macmillan,* LND, 1984．

本研究に当たり、平成22年度岐阜聖徳学園大学特別研究助成を受けました。